

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月30日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520412

研究課題名（和文） 同時通訳に見られる概念的複合の検証

研究課題名（英文） Verification of Conceptual Complexes in Simultaneous Interpreting

研究代表者

船山 仲他（FUNAYAMA CHUTA）

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：10199416

研究成果の概要（和文）：

実際に行われた同時通訳を分析し、実態としてどの程度の同時性があるのかを検証した。その結果、時間的な同時性はむしろ限られた場合のみで、個々の表現の対応を見るとかなり時間差があることがわかった。その間話の内容を保持している様態を分析すると、通訳者の概念化が関わっていると考えるを得ない。その実態を概念的複合の観点から捉えると、人の言語理解・産出一般の説明につながる。

研究成果の概要（英文）：

This research analyzed records of authentic simultaneous interpreting to examine the reality of simultaneity in its actual performance. It was verified that the time difference between a source expression and its translation is often big with actual simultaneity rather exceptional. The ways certain content is kept in the interpreter's mind showed it is conceptualized. Such observations will lead us to take conceptual complexes as a way to explain how people understand and produce utterances in general settings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：同時通訳

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究開始以前は、英語から日本語へ、あるいはその逆の同時通訳において、通訳者がどのように起点発話（原発話）を理解し、

どのように目標発話（訳出）の表現を選んでいるかを概念化の視点から説明する枠組みはなかったと言える。つまり、発話一般の理解、産出に関する言語心理学的モデルは通訳

のプロセスに言及できる程詳しいものではなく、通訳理論として通訳のメンタルなプロセスを概念の展開として記述する枠組みも不十分なものであったと考えられる。そこで、本研究では、同時通訳者のメンタルな作業の結果としての目標発話を記録し、それを導いた起点発話を同時に記録することによって、起点発話のどの表現が目標発話のどの表現のきっかけになったかを時間軸の上で関連させることを課題の重点とする。その関連を観察し、分析することは、同時通訳者がどのような思考プロセスを通して通訳しているかを探る情報を与えてくれる。

(2) そのようなプロセスを“概念的複合”という視点から捉えるが、この捉え方は、発話理解、産出一般のプロセスをこれまで以上に詳しく分析することにつながる。言語心理学における発話理解の研究においては、Kintschの状況モデルなどがあるが、発話理解のオンライン性については特別な配慮は与えられていない。この側面は、オンライン性が顕現する同時通訳のモデルには必須の要件となることがわかりやすいが、発話理解一般のプロセスにおいても実際の処理はオンラインで展開しているものであり、同時通訳に関する考察が言語理解一般の考察に貢献することは大いに期待できる。その点で、本研究は発話理解全般について理解を深めることにも役立つと思われる。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的のひとつは、上質のデータを集めることにある。そのためには、高度な技術を持つ同時通訳者が“生”で行なった同時通訳に注目する必要がある。また、起点発話の論理性、明瞭性の点でも質の高いものが望ましい。目標発話の妥当性を正當に評価するためには起点発話の質にも注意する必要がある。

熟練した通訳者をデータ収集の対象とするのは、誤訳や訳漏れをできるだけ避けるためだけではなく、確信をもって通訳している部分が多ければ多いほどデータの信頼度が高まるからである。すなわち、通訳者が話の内容を安定的にしっかり把握していることがわかりやすい通訳につながり、そのようなわかりやすい目標発話が通訳者の理解を探る上で好材料となる。このことは、一見起点発話に含まれないと思われる情報が目標発話に含まれる場合にもその概念的きっかけを探ることが有意義な作業となる可能性を高めることにもつながる。(その点で、分析者自身通訳者の熟練度を測れる能力をもっていることが望ましい。)

“生”で行なう同時通訳とは、起点発話者が準備された原稿を読み、その原稿を通訳者

も事前に読むことができるような状態ではない、ぶっつけ本番の同時通訳のことである。このような同時通訳においては、通訳者はその場で聴取した情報に反応していると考えられる。通訳者の理解には通訳者自身の知識や論理構成力が関与するが、その場の入力情報としてはその場での起点発話者の言語表現に限ることができ、他の情報源を通訳の際に援用する事態を避けることができる。

話題の背景情報を分析者が共有することは、通訳者の理解度を測るために必要である。特殊な分野の技術的な話であれば、目標発話の妥当性やわかりやすさを分析者が判断することは難しいが、時事的な話題であれば、分析時に新聞などの手元資料を活用することも可能である。分析者の理解度が十分高いことは通訳者の理解度ををはかるために必要である。

(2) 本研究は通訳者の言語知識を確かめることを主目的とするものではないので、対訳の一般的妥当性を前提とした訳語の評価を指すわけではない。本研究の目的は、同時通訳が進行する途上、通訳者の頭の中に生まれ、融合し、変遷する概念を“概念的複合体”として捉えようとする点にある。どのような概念的な複合が生起しているかを起点発話表現と目標発話から推定することによって、通常は対訳とみなされない部分にも概念的対応があることを同定し、通訳者の思考の展開を跡づけようとするのが本研究の試みである。

3. 研究の方法

(1) 実際の同時通訳をステレオ録音したものを文字化し、1行目に起点発話(原発話)を記し、生起のタイミングを合わせて2行目に目標発話(同時通訳)を並行記述したものをセットとする。通訳者にとっての入力情報と訳出の時間的關係を分析するため、**「えー」**や**「まー」**などの埋め草や繰り返しなども記録に含める。

(2) 辞書的に対応する表現を参考にしながら、訳出のきっかけとなった起点発話の要素を見極める。その際、単語単位の対応だけではなく、ひとつの起点発話の単語を構成する要素にまで分解したり、あるいは、複数の単語を統合する概念も検討に含める。また、目標発話における概念的要素の順序の入れ替えにも注目する。

(3) 上記の手順によって明らかになった起点発話、目標発話の意味の構築を時間の流れの中での前後関係、時間的間隔の長さ(実時間および語数)を視野に入れながら、概念的複合の観点から考察する。起点発話に辞書的

対応が見いだせない場合についても概念的関係を十分に分析する。

4. 研究成果

(1) 同時通訳という言語活動の特殊性はひとりの人間が聞くことと話すことを同時に行う点にあるが、聞いて理解すること、ある内容について話すことそれぞれは通常の言語活動である。特殊性はそのような二つの活動を限られた時間内に連携させることにあるが、その連携は概念的なものであると考えることによって実際の同時通訳に現れる現象をうまく説明することができることが確かめられた。たとえば、起点言語において、*the economy is not in great shape* … (この間に13語あり) … *collapsing* … (この間に18語あり) と表現が続いた時点で「経済が破綻」という訳出がなされていることから、「経済」と「破綻」の融合は概念的な把握に基づいていると考えられる。また、これだけの時間「経済」と「破綻」が保持されていること自体、語彙形式ではなく概念で保持されていると考えた方が説得力がある。本研究においてはこのような現象が多々同定され、概念化と概念の複合化に支えられている側面が検証された。

(2) 概念化と呼べるプロセスが想定されるとして、次に、それではそのような概念化をどのように記述すべきか、という課題が生じる。実際の同時通訳に観察された次のような対訳ペアは概念記述がクリアすべき基準の一つを提供する。(ここでは起点、目標発話の骨子となる部分だけを再現する。また、タイミング的には、(a)の英語がほぼ話されてしまったタイミングで(b)の日本語訳が産出されている。)

(a) *India is going to consume more energy.*
(b) インドではエネルギー消費が増えるでしょう。

この例は、品詞という言語表現上の文法情報が概念レベルで扱われ得ることを示している。冒頭の *India* が「インドは」ではなく「インドでは」と訳されていることは、この部分だけを見ると必然性がないように見える。英語では *India* が名詞として主語となっているのであるが、これを日本語訳でも「インドは」と主語とすることが不都合であると積極的に考える理由はこの段階では見あたらない。しかし、その後の表現とは整合性を持つことになる。(別の次元の話としては、同時通訳における「～では」という場所表現の有用性は経験の蓄積による方略の側面も持つが、それはこの例に類似する成功例に基づくと考えられる。)

起点発話の *consume* という動詞は日本語では「消費」という名詞で表され、*more* という

形容詞は日本語では「増える」という動詞で表わされている。このような品詞変換をルール化することは不可能ではないかもしれないが、同時通訳において利用するほど簡潔なルールを設定することは難しいし、直訳的に同等な品詞で処理することの容易さを考えれば現実的な手段とは考えられない。それではこのような品詞変換はなぜ生じたのであろうか。本研究で注目したのは、概念的に掘り下げた領域での対応である。つまり、「より多くのエネルギーを消費する」という言い方をしている英語の表現を概念的に捉え、それを *is going to* の概念と組み合わせると、「増える」となる。「エネルギーを消費する」という英語の言い方の核となる概念は「エネルギー消費」という名詞句表現に変えても概念的の中身は同じである。このように考えると、英語表現(a)を日本語表現(b)で表すことは、概念レベルではほとんど追加的努力を必要としない。また、「エネルギー消費が増える」という文として完結した表現は先の「インドでは」という場所表現とも整合性を持つ。

この例が示すことは、品詞という形式がもつ意味にこだわらず、そこで表され得る状況を概念的に別様に整理すること、つまり言語的意味から概念的に掘り下げた捉え方をすることが同時通訳者の作業を支えているのではないか、ということである。その点で、認知言語学で議論されている事象構造(event structure)をこのような概念的整理の枠組みとして活用することも考えられる。(認知言語学では時間の流れに言及されないのが普通であるが。)

(3) 同時通訳の特殊性が単語単位の迅速な翻訳ではなく、概念化された内容のかなり長い時間の保持や概念の複合化であることが確かめられた結果、それは特殊な技術の獲得による側面よりも、一般的に人に備わっている概念化の能力に依存する側面の方が関係する可能性が大きくなった。そうすると、同時通訳における概念操作の研究が発話理解一般、発話産出一般の研究に貢献する可能性があることになる。つまり、理解や産出が言語的意味のレベルに終始するのではなく、話し手や聞き手の頭の中での概念化に関わることをどう示すかについて、同時通訳の研究が具体的な記述装置を提供することができると考えられる。

(4) “概念的複合”という用語は本研究を通して明確化が進められている新しい用語である。言語表現の“意味”とは何かについては言語学、哲学、心理学など様々な分野で様々な議論が行われているが、文脈において特定化が図られる意味を辞書の意味と同じレベルで記述することは難しい。実際に聞き

手の頭の中に生じる考えは辞書的意味のような一般性の高い概念ではなく、かつ、文脈の進行に従って変化していく動的なものと考えられる。(関連性理論(relevance theory)は文脈などからの想定に基づく推論の働きに注目しているが推意そのものを形成するメンタルな動的プロセスを記述することを主眼とするものではないと言えるだろう。)本研究で提案された“概念的複合体(conceptual complex)”は想起される概念にまとまりをつけながらその概念の経時的変化も表そうとするものである。ただし、その時点その時点で聞き手の頭の中に生起する概念の全てを網羅的に記述することは目指さず、大きな理解に向けて必須となる概念的要素に注目する。

同時通訳においてはそのような概念的要素は訳出に必要なものに限定される可能性が高い。つまり、ある時点において通訳者の頭の中にある起点発話理解を構成する“概念的複合体”に近い内容を目標発話から推測することができる。そして、それに基づき通訳者が訳出表現をどのように見出していかを考察することができる。

同時通訳研究において“概念的複合体”の具体像を描けるとすれば、それは概念的な複合の考え方を実証的に考察することを可能にしてくれる。そうすると、そのような知見に基づいて、“概念的複合体”の捉え方自体を発話理解一般に適用していくことができると考えられる。その点で、同時通訳記録に関する本研究がさらに言語理解一般の研究につながっていく可能性があることを示したと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 三島篤志、日英同時通訳のイントネーション、神戸外大論叢、査読有、第63巻、2013、45 - 60

② 船山仲他、通訳するための思考、通訳翻訳研究、査読有、2012、No. 12、3-19

[学会発表] (計1件)

① Tamai, Ken, Impact of Systemic Functional Perspective as a Means to Capture Growing Reflective Literacy: Analysis of a Novice Teacher's Teaching Journal, British Association of Applied Linguistics at University of the West of England, 2011年9月2日

[図書] (計1件)

① Tamai, Ken, Tatsuhiro Yoshida, Hiroyuki

Imai, Yoshiyuki Nakata, Osamu Takeuchi, 2009, *Researching Language Teaching and Learning: An Integration of Practice and Theory*, Peter Lang

6. 研究組織

(1) 研究代表者

船山 仲他 (FUNAYAMA CHUTA)

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：10199416

(2) 研究分担者

玉井 健 (TAMAI KEN)

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：20259641

三島 篤志 (MISHIMA ATSUSHI)

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：10249443

(3) 連携研究者

無し